『枕草子』の「をかし」の価値

土屋博映

『源氏物語』を、「もののあはれ」、『枕草子』を「をかし」と呼ぶこと、これはもうみなさん、御承知のことと思います。

こう呼ばれた理由の一つは、『源氏物語』には「あはれ」が、『枕草子』には「をかし」が多用されていることにあるようです。

ところで、本居宣長が『源氏物語玉の小櫛』で、『源氏物語』の本質を「もののあはれ」と規定して以来、それが万人の認めるところとなり、さらに平安時代の文芸理念となったわけですが、ならばひとり『枕草子』のみ、「をかし」の文学とたたえられるのは、おかしい気持が致します。

私は既に、拙稿『枕草子の「をかし」と「あはれなり」』[注(1)]、『枕草子の美的理念語』[注(2)]で、『枕草子』の「あはれ」と「をかし」の位置について述べております。ここで、少し、『枕草子の美的理念語』から、私の考えを引用しておきたいと存じます。

さて、枕草子の作者の美を評価する意識は如何なるものであったろうか。それは、まず、「をかし」と感じ得るか否かからはじまったものと考えられる。「をかし」とはある一点に快感を持てばよいのであって、それほどの強い意味はないわけである。ところが、そうして美を評価していったとしても、「をかし」だけでは充分に表現しきれない部分も当然表れてくるわけである。対象に「をかし」を感じ、それで事が足りれば「をかし」と評価をするが、高貴なもの、それを強調したい場合、「めでたし」が用いられ、小さいもの、幼いものには「うつくし」が、「をかし」で言い表わせなかったものを補充するといった過程をたどるのである。

ところで、「あはれなり」は「をかし」を主軸とする枕草子の性格により、美的理念語としては孤立したものとなっているようである。快感を根底におく「をかし」と哀感を根底におく「あはれなり」は二大美的理念語とも呼ぶべきものであろうが、枕草子においては「あはれなり」の位置は、「めでたし」などの一連の語と、「をかし」を支えるものという点で同一レベルのものであ

ると言えよう。

などと結論したわけです。つまり、他の平安文学、就中、女流文学の基本は「(もの)あはれ」にあるわけなのですが、『枕草子』に関しては、これがまったくあてはまらない。清少納言は、対象を「をかし」という視点でとらえようとしているのです。

大体が、日記・物語文学全盛の平安時代中期に、『枕草子』のみ随筆文学として名を成したというのも、考えてみれば実に変な話です。ある意味で言えば、文学史の正統な流れの上にのらない、突然変異的なものともできるくらいなのです。話が少々横道にそれるかもしれませんが、この件に関して、私は次のように考えております。

『枕草子』の個性的なところは、その中に存在する類集段にあることも周知のことですが、類を集める、「もの」型、「は」型章段に、彼女の興味の源流がうかがい知れるようです。つまり、ある事件の流れをおって記述する——これが、日記や物語の記述方式なのですが——ことよりは、興味ある対象の選択に目が向けられていたということなのです。

『枕草子』の原形は、雑纂形態か、[注(3)]類纂形態か、[注(4)]という問題がありまして、これはほぼ雑纂形態であったろうという説が確定的になっております。それはどうしてかというと、雑纂形態である三巻本や能因本を整理しなおした時に、如何にしても分類しきれない段が出てくることによるのです。もしも類纂形態が原形であるならば、雑纂形態を分類しなおしても、その分類が可能であるはずだからです。そしてこの雑纂形態が『枕草子』の原形であるとすると、随筆文学と成り得たことに関し、まことに説明がうまく行くのです。

もともと日記を書き記しているうちに、彼女本来の、興味ある対象の選択、という気持がわきあがってくれば、その回想的部分の前後関係などどうでもよい、日次(ひなみ)の記という形式はまったく必要がなくなってしまうのであります。だから、作者の清少納言には、本来、「随筆」文学をものそう、などという大それた発想などなかったということなのです。私のは、ちょっとかわった日記ね、程度だったと思われるのです。

類集段は、同類のものを集めることの興味であり、随想段は日記から時間を省略したもの、とまあこう考えておいてはどうでしょう。ついでに回想段は、順番など無視。日記文学には、既に『土佐日記』や『蜻蛉日記』など、時間の経過通りに描く模範があるのだから、それをうけつがないのは、相当なヘソまがりとも思われます。事実、『和泉式部日記』『紫式部日記』[注(5)]『更級日記』などは、その模範を確実に継承しております。こういう点は、彼女の常識に対する反抗と申しましょうか、紫式部がひかえめにしていた漢文の知識を、人前で堂々とひけらかしたのも、性格的に関連があるといってよいでしょう。私は他の人とは違っているんだから、という思いこみが、結果的に日記文学から随筆文学へと方向を転じさせたものと、私は信じております。

話をもとにもどしますが、『枕草子』が、「をかし」の文学と呼ばれたのは、以上のようなことが原因となっているのに相違ないのです。

他人が「あはれ」という、しみじみとした気持、また時に悲しさ・寂しさを抱いて対象をとらえる時に、一人彼女のみが「をかし」で対象をとらえようというのは相当な性格の強さ、意固地さなのであります。

それはまた、――『枕草子』が書き著された時期が問題ともなりますが――没落して行かねばならなかった中関白家の定子に仕えていたことも大なる関連を持つのかもしれません。自分の敬愛していた中関白家、定子に対し、本当に「あはれ」な状況を「あはれ」でとらえるなど、とても無理な相談だったでしょう。そこで対象を「をかし」ととらえたわけです。持ち前の彼女の性格と、その環境があいまって「をかし」の文学が成立した、とこう考えてみるとすべての点に納得がいくのであります。

ところで、私が『枕草子』の「あはれ」と「をかし」の関係について疑問を抱きましたのは「春は[注(6)]あけぼの」ではじまる、あの有名な冒頭の段によってなのです。ご存知とは思いますが、一応例文をあげてみましたので、確認してください。

秋は夕暮。夕日のさして山のはいとちかうなりたるに、からすのねどころへ行くとて、みつよつ、ふたつみつなどとびいそぐさへあはれなり。まいて雁などのつらねたるが、いとちひさくみゆるはいとをかし。日入りはてて、風の音むしのねなど、はたいふべきにあらず。

これは岩波書店「日本古典文学大系」の本文・三巻本によるものですが、「秋は夕暮」の部分です。夕暮の情景から、日が沈み風や虫の音に興味がうつっている、視覚から聴覚への転換の妙などとほめたたえられるところです。まず、「からす」をとらえて、そのとびいそぐさまを「あはれなり」と把握し、次に「雁」をとりあげ、その遠くに飛ぶさまを「をかし」と評価しております。まあ、単純にというか、素直に考えてみますと、「からす」よりは、「雁」の方が、外見的にも、文学的な意味あいからも趣深いものであります。したがって、「からす」は単に「とびいそぐ」なのですが、「雁」は「ちひさくみゆる」、点描となっておりまして、これも「雁」に趣が感じられるように見られます。さらに、「からす」と「雁」を「まいて」で結ぶ――間に「まいて」が入っている――わけですが、これによって「雁」を「からす」よりも上位に位置づけていることが明確になるのです。とすれば、「からす」の評価「あはれ」よりも「雁」の評価「をかし」の方が、評価としては高い、ということになってしまうのです。

これが能因本を底本とする、小学館の「日本古典文学全集」によりましても、次のようになっております。

秋は夕暮。夕日花やかにさして山ぎはいと近くなりたるに、烏のねどころへ行くとて、三つ四つ二つなど、飛び行くさへあはれなり。まして雁などのつらねたるが、いと小さく見ゆる、いとをかし。日入り果てて、風の音、虫の音など。

三巻本を底本とする、文学大系では「みつよつ、ふたつみつ」が、こちらでは「三つ四つ二つ」とか、「とびいそぐ」が「飛び行く」とか、

さらに「まいて」が「まして」になどとかわってはおりますが、「あはれ」よりも「をかし」が上位であることにはまったく変化がありません。したがって書写の段階でのあやまりなどではなく、もともとこのような位置関係にあるべきだったと確信できるのであります。

さて、『枕草子』が「をかし」の文学であったことを確認できるもう一つの事実もございます。それは、数ある「もの」型章段の中に、「をかしきもの」が存在しないということです。「あはれなるもの」が存在するのに「をかしきもの」がないことは、決して「をかし」の価値が低いということではないのです。大体、百例[注(7)]に満たない「あはれ」が「もの」型章段として存在するのに、四百[注(8)]例以上が見られる「をかし」が「もの」型章段にないということは、次のように考えるしかないでしょう。

『枕草子』は、「をかし」を根底として、対象をとらえたのである、だからすべての評価は「をかし」という基準を通過した上で決定されるのである、ということです。でありますから、その上に「をかしきもの」を設定するということは蛇足以外の何物でもないということになるのであります。

ここで、「あはれなるもの」についてちょっとふれておきたいと思います。三巻本と能因本では異同が多いので、参考までということで、三巻本の「日本古典文学大系」の本文のみあげておくこととします。

あはれなるもの[注(9)]　孝ある人の子。よき男のわかきが御嶽精進したる。たてへだてゐて、うちおこなひたるあかつきの額など、いみじうあはれなり。むつまじき人などの、目さまして聞くらん思ひやる。まうづる程のありさまいかならんなど、つつしみおぢたるに、たひらかにまうで着きたるこそ、いとめでたけれ。鳥帽子のさまなどぞ、すこし人わろき。なほ、いみじき人と聞ゆれど、こよなくやつれてのみこそまうづと知りたれ。

「孝ある人の子」とは、「孝心ぶかい子供」ということですが、一説に「親の喪に服している子」とも考えられていますが、続く文を考えると、後者の方がよいという気がします。「御嶽精進」とは、「金峰山に入る者が、あらかじめ長期の精進を行うこと」であります。いずれにせよ、対象は人間であって、人間の深い心情について述べられているわけです。この段は連想の発展がさらに続き、最後に「あはれなることにはあらねど、御嶽のついでなり」とまとめることを前提で、「右衛門の佐宣孝といひける人」の話になっています。そして、「男も、女も、わかくきよげなるが、いとくろき衣を着たるこそあはれなれ」と、やはり人間の心情というものを対象としているのです。以下、段の終わりまで、記してみます。

九月つごもり、十月ついたちのほどに、ただあるかなきかに聞きつけたるきりぎりすの声。にはとりの子いだきて伏したる。秋ふかき庭の浅茅に、露のいろいろ、玉のやうにて置きたる。また、夜などもすべて。山里の雪。思ひかけはしたるわかき人の中の、せくかたありて心にもまかせぬ。

ようやく「あはれ」の本領とも言うべき自然の情景も描かれますが、それにしても単なる情景としては「山里の雪」くらいしか見られません。こういった点から、「あはれ」の美的理念語の位置が、『枕草子』では、「をかし」よりも下位に属する、と認めなければならないことになってしまうのです。

参考の参考ということで、恐縮なのですが、「をかし」を基準として、さらにそれのレベルアップした対象についての評価として「めでたし」[注10]があることについても一言述べておきたいと思います。ただしこれは、美的理念語として、「めでたし」が「をかし」よりも上位に存在するということでは無論、ありません。「をかし」を基準として、「をかし」では表現しきれないものを意味するものとして、やはり「をかし」のアシスタントにすぎないのであります。

めでたきもの　唐錦。飾り太刀。つくり仏のもくゑ。色あひふかく、花房ながく咲きたる藤の花の、松にかかりたる。

六位の蔵人。いみじき君達なれど、えしも着給はぬ綾織物を、心にまかせて着たる、青色姿などめでたきなり。所の雑色、ただの人の子どもなどにて、殿ばらの侍に、四位五位の司あるが下にうちゐて、なにとも見えぬに、蔵人になりぬれば、えもいはずぞあさましきや。宣旨など持てまゐり、大饗のをりの甘栗の使などに参りたる、もてなし、やむごとながり給へるさまは、いづこなりし天降り人ならんとこそ見ゆれ。

これも日本古典文学大系の本文によります。まず「めでたし」の特徴は、その対象のはなやかさ、あでやかさにあることが明らかであります。

「唐錦」は、中国渡来のもの。「飾り太刀」は、装飾を施した太刀、「つくり仏のもくゑ」とは、仏像に施された彩色の木画、いずれもあざやかなものであります。「藤の花」のみ、植物でありますが「花房ながく」とか「松にかかりたる」は、はなやかさを示すものとなっています。「六位の蔵人」については、その「青色姿」、また「宣旨」や「大饗」に関わることを評価しています。

実は「めでたきもの」は、さらに続き、「御むすめ后にておはします」とか、「博士の才ある」「法師の才ある」「后の昼の行啓」「一の人の御ありき」「春日詣」「葡萄染の織物」「むらさきなるもの」などが列挙されます。これらはいずれも人物に関わるものとなっています。ただひとつ、「ひろき庭に雪のあつく降り敷きたる」と、情景について述べられますが、おおむね「めでたし」は人物や人物の身のまわりのはなやかさを対象としていると言えそうです。

「をかし」を基準とした『枕草子』では、「あはれ」は、その美的理念語の価値を本来のものから下げられ、「めでたし」は当然のごとく「をかし」で表現しきれない対象を担当することになっていることが、ほぼ明らかです。

私は、前述しましたように『枕草子の美的理念語』という拙論を公にしておりますが、その中で、『枕草子』の美的理念語には、次のような段階があると結論しております。

①主要美的評価――をかし・めでたし・あはれなり
②一般美的評価――うつくし・なまめかし・おもしろし・たふとし・うらやまし
③美的要素――きよげなり・やむごとなし・うるはし・をかしげなり・めづらし・あざやかなり

この段階は、その語のもつ、幅の広さによって位置づけられています。主要美的評価は、主要であるだけに対象の幅の広さをもっていなくてはなりません。その点で、一応、主要美的評価に含まれるとは言っても、人間の深い心情中心の「あはれ」や、人物中心の「めでたし」では、「をかし」にトップの地位を譲るほかはないのです。

さて、「をかし」と「あはれ」の決定的な違いを示すものとして、いくつかの例をあげてみることにします。いずれも今までにならって日本古典文学大系の本文を用いることとします。

注(12) 池ある所の五月長雨のころこそいとあはれなれ。菖蒲・菰など生ひこりて、水もみどりなるに、庭もひとつ色に見えわたりて、曇りたる空をつくづくとながめくらしたるは、いみじうこそあはれなれ。いつも、すべて、池ある所はあはれにをかし。冬も、氷したるあしたなどはいふべきにもあらず。わざとつくろひたるよりも、うち捨てて水草がちに荒れ、青みたる絶え間絶え間より、月かげばかりは白々と映りて見えたるなどよ。

すべて、月かげは、いかなる所にてもあはれなり。

この段は「あはれ」が基調になっているようですが、注目したいのは「あはれにをかし」の部分です。「池ある所」について述べたてて、――それは「あはれ」の対象であったのですが――まとめとして「すべて、池ある所はあはれにをかし」となっているのです。ここで注目するのは「あはれ」と、「をかし」の語順です。「あはれ」ではなくて、「をかし」でしめくくっている所に目を向けてみたいのです。これは、如何に対象を「あはれ」と把握しようが、最終的には「をかし」で評価するという基本姿勢によるものと考えられます。「あはれ」「をかし」を並列と見ても同じこと。とにかく「あはれ」を基調とする段に「をかし」がわりこんでいる状態はとても黙って見すごせたりするものではありません。

続けて例をあげてみることにしましょう。

注(13) 野分のまたの日こそ、いみじうあはれにをかしけれ。立蔀・透垣などのみだれたるに、前栽どもいと心くるしげなり。おほきなる木どもも倒れ、枝など吹き折られたるが、萩・女郎花などのうへによころばひふせる、いと思はずなり。格子の壺などに、木の葉をことさらにしたらんやうに、こまごまと吹き入れたるこそ、荒かりつる風のしわざとはおぼえね。

「野分のまたの日」の情景について述べた段ですが、冒頭から「あはれにをかしけれ」と対象をとらえます。あくまでも「をかしくあはれなり」ではないのです。ここなどは冒頭――もっとも、細かく見ますと前段、前々段と関連はあるようですが、その場合でも「あはれ」と「をかし」がそれらには含まれていますので、「あはれ」と「をか

し」は対等であるはずです――なのですから、そうあってもいっこうにかまわないはずなのです。

同様にもう一例あげます。

また、業平の中将のもとに、母の皇子の、「いよいよ見まく」[注14]とのたまへる、いみじうあはれにをかし。ひき開けて見たりけんこそ思ひやらるれ。

やはり「あはれにをかし」となっています。逆の語順でないということで、「をかし」が優位に立つことはもはやまちがいのないところです。

連接というのではないですが、「あはれ」と「をかし」が関連する例もあげておきましょう。

清水[注15]などにまゐりて、坂もとのぼるほどに、柴たく香のいみじうあはれなるこそをかしけれ。

「柴たく香」を対象とするのですが、一度、それを「いみじうあはれなる」と評価しておいて、さらに「をかしけれ」とまとめているのです。これなどは連接していた前の三例よりもさらに「をかし」の優位を示す証拠となるものではないでしょうか。

平安時代の文芸理念は「もののあはれ」とまとめられてよいようです。しかしその中で、『枕草子』のみが「をかし」の文学と呼ばれるのは、それだけ個性的であるということです。それは一つに、彼女のもって生まれた性格によるものでありますし、また彼女の境遇が彼女にそのような作品を描かせたのだということでもあります。

本来日記文学として存在したであろう『枕草子』が、随筆文学――我が国最初の――と成り得たのも、そういったことが原因となっているのであります。

「をかし」の文学と呼ばれるなら、『枕草子』の基本は「をかし」であり、「をかし」が如何なる他の美的理念語よりも優位に立たねばならないはずですが、「春はあけぼの」の冒頭の段が、いみじくもその事実を暗示してくれたようであります。

また、「をかしきもの」が存在しないことは、存在しないことによってかえって、その「をかし」の優位性を示しているということです。作品全体の基調であるからこそ、「をかしきもの」は記されなかったということになるのです。

「あはれ――をかし」の語順は、また「をかし」が優位であることの証明でした。これこそ、作者の心の奥にひそむものが「をかし」であることを如実に示していることに他なりませんでした。

拙い考えではありますが、『枕草子』の謎めいた部分に、わずかながらでも光があてられればと思い、述べさせていただいた次第です。また私の、『枕草子』研究の基本姿勢の確認といった意味あいでも述べさせていただきました。（本学助教授）

本稿は、59年度国内研修員として、筑波大学に留学させていただいた折、研究した種々の項目の中から一つを選んで、筑波大の学部生に講演した原稿をもとにまとめたものであります。

注

(1) 『佐伯梅友博士喜寿記念国語学論集』所収

(2) 『中田祝夫博士功績記念国語学論集』所収

(3) 三巻本、能因本がこの形態をとる。

(4) 前田本、堺本がこの形態をとる。

(5) 人物評がのせられるなど、やや注意の必要とされる日記である。

(6) 各系統本ともに、第一段にあたる。

(7) 『枕草子』中、三巻本によれば八十一例存在する。

(8) 『枕草子』中、三巻本によれば四百二十一例存在する。

(9) 第一一九段である。

(10) 『枕草子』中、三巻本によれば百四十五例存在する。

(11) 第八八段である。

(12) 第二七段である。

(13) 第二〇〇段である。

(14) 第三〇九段である。

(15) 第二二九段である。